



Title	<学界動向>第二回ソヴェト問題国際会議の報告
Author(s)	岩間, 徹
Citation	スラヴ研究, 3, 139-143
Issue Date	1959
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/4944
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113137.pdf



[Instructions for use](#)

第二回ソヴィエト問題国際会議の報告

岩 間 徹

1956年9月22日から26日にかけて、オーストリアのBadausseeに近いHotel Wasnerinで、「ソ連邦とアジア。アジアにおけるソヴィエトの影響の積極的また消極的構成要素」(The Soviets and Asia. Positive and Negative Components of Soviet Influence in Asia)という問題を中心に国際会議が開かれた。Badausseeはモツェルト生誕の地として有名なSalzburgからバスで約4時間東南へ入った山間湖沼の景勝地である。この町外れに山小屋風のHotel Wasnerinがある。晴れた日にはホテルの南の窓から雪をいただく岬々たるDachsteinが望まれる。ホテルの前の街道の並木道に、林檎が小粒の赤い実を一ぱいつけていた。あたりは放牧の牛の鈴がきこえる山間の牧場が起伏している。この静かな田舎のホテルに、アメリカ、西独、イギリス、フランス、印度、日本、オランダ、オーストリア、スウェーデン、スイスの各国からソ連問題の専門家約30名があつまって、5日間に亘って、連日、報告と討議を重ねた。

9月22日午前9時、この国際会議は世話役のÖsterreichische Arbeitsgemeinschaft Ost = "Centre of Eastern Studies" (Wien) を代表して、その会長で文部大臣のDr. Alfred Weikertの挨拶を以て始まり、次いでOsteuropa誌を出しているDeutsche Gesellschaft für Osteuropakunde (Stuttgart) のDr. Klaus Mehnertの研究プログラムの説明並びに会議出席者の紹介が行われた。そして同日の午後からいよいよ報告と討議が開始された。研究プログラムは6の題目と2の特別題目から成っていた。題目及び報告者は次の通りである。

Topic 1: The Transformation of Society and the Present Social System of the Soviet Union as Model. (Prof. Alex Inkeles, Cambridge, Mass.)

Topic 2: Bolshevic Seizure of Power and Soviet Form of Government as Model. (天羽英二, 東京)

Topic 3: Collectivization of Agriculture and Agrarian System in the Soviet Union as Model. (Dr. Walter Klatt, London)

Topic 4: Forced Industrialization and State Planning of Economy in the Soviet Union as Model. (Dr. Oleg Hoeffding, Santa Monica / Calif.)

Topic 5: Education and Professional Training in the Soviet Union as Model. (Mrs. Carrère d'Encausse, Paris)

Topic 6: Moscow's Nationality Policy as Model. (Colonel Geoffrey Wheeler, London)

Special Topic 1: Relationship between Peking and Moscow. (Dr. Klaus Mehnert, Stuttgart)

Special Topic 2: Soviet Economic Aid for Asia. (Harish C. Kapur, India)

以上のうち第5題目は報告者が欠席したため、英国外務省のソヴィエト問題の顧問Mrs. Violet Conollyが代ってその要旨を報告した。なお追加として、Deutsche Gesellschaft für OsteuropakundeのDr. Arnold Buchholzが„Über die Sowjetphilosophie als Modell für Asien“と題して、最近ヴェニスで開かれた第12回国際哲学会議の席上ソヴィエトの哲学者Jowtschukが取扱ったテーマについて報告した。

研究プログラムが示す通り、Soviet Modelがアジア諸国、とくにアジアの低開発諸国の近代化に適するや否や、Soviet Modelのアジアに対するapplicabilityが問題にされた。これがこの会議の中心テーマであった。この問題を中心に行われた報告及び討議はいずれも興味と関心を惹くものであったが、私はその全部を一々紹介する労をはぶき、その中三つの報告だけを取り上げ、他の報告は割愛することにした。私に取り上げる三つの報告は次の通りである。

1. Prof. Alex Inkeles, *Soviet Social Development. A Model for Asian Countries?*
2. Dr. Walter Klatt, *Food and Farming in Asia—The Soviet Pattern and its Application.*
3. Dr. Oleg Hoeffding, *Soviet State Planning and Forced Industrialization—A Model for Asian Countries?*

I Harvard 大学の Alex Inkeles 教授は『ソヴェートの世論』(辻村明訳)という邦訳もあり、我が国のソ連専門家によく知られている。教授の報告は、ソヴェートの社会発展がアジア諸国のモデルたりうるかという問題をあつかったもので、第1日の午後、ソ連経済の専門家 Oxford の Peter Wiles 氏の司会で行われた。Inkeles 教授の報告はこの会議の序論でもあり、またこの会議の一つの共通の結論でもあった。教授はまずアジアの指導者の根本的要望は民族的再興であり、独立あるいは自治を維持するために国家を強化することだという。然らばその方法如何? Ghandi のとった方法を例外として、アジアの指導者はいずれも国家が指導的役割を演ずる重工業建設を意図している。それ故彼らの眼に Soviet Model が魅力的な型として映ったとしても別段不思議ではない。教授はそこでソヴェートの発展を研究する学者の大切な現実的な仕事があるという。つまりソヴェート社会の発展の型が実際どのようなものであったか、その発展のためにどのような代価が支払われたか、その主なる特徴は現在どのようなものであるか、この体制の強さと弱さはどのように考えられるか、これらを事実に基づいて評価することによって、ソ連専門学者はアジアの指導者のために寄与することができるのである。この課題にアプローチするため教授は次の諸点に注意を喚起している。

Inkeles 教授は、まず第一にモデルとしてのソヴェート社会にアプローチするために、(1) マルクス・レーニン主義理論に表現された社会主義社会のモデル、(2) ソヴェートの宣伝によるソヴェート社会像及び(3) ダイナミックに機能する社会体制としてのソヴェート社会の現実とをとくに区別しなければならぬという。ソヴェートの社会構造の現実マルクス・レーニン主義理論に表現された社会主義社会のモデルに対して限定的な関係しかもたず、また多くの場合ソヴェート資料の宣伝による社会像とは似もつかぬものである。

第二にソヴェート体制の発展段階、時間的次元を区分することだ。このような基本的な区分をしないことがソヴェート発展に関する混乱の生ずる最も大きな原因の一つだ。強制的な工業化と集団化の時期におけるソ連邦は新経済政策の時期とは全く異なる型の社会体制を有し、また工業化、集団化の時期の社会体制は50年代の成熟せる体制ともいちじるしく異っている。したがってそれぞれ異なる発展段階からソヴェート体制の諸要素を勝手にとりあげてはならない。このような限定を設けることによって多くのアジアの指導者にソヴェートの発展について別個の展望を与えることができるであろう。

第三にソ連邦における社会的変化の手段がどのようなものだったかを十分知ることだ。どんなモデルでも同じことがいえるわけだが、Soviet Model の場合でも、ソ連邦において社会的変化をもたらした独特の社会的機能を十分考慮しないで、これが適当だとか適当でないといっても始まらない。ソヴェート社会の変化をもたらした独特の社会的機能としては、一党制、劃一的正統イデオロギーの強制、マスコミの巨大な独占体制の発展、社会的変化の過程に参加を強制する適当な諸手段の発展などがとくにあげられる。多くのアジアの指導者はソヴェート世界において強制的な変化をもたらしたこれらの手段あるいはその他の手段がいかに苛酷な役割を果しているかについて十分知っているとはいえない。

第四は変化の結果についてである。近代化を成就する。それは結構である。しかし近代化の成就において伝統的文化遺産を失うかも知れぬ。それでは困る。こういうジレンマにアジアの指導者や人民は直面している。とくに Soviet Model の場合、非常なスピードと高度の集中化とを要求するので、伝統的価値の破壊はほとんど完全に、またきわめて苛酷に行われる。このような変化の結果についてもアジアの指導者は思いを致さなければならぬ。

Inkeles 教授の結論としてはソ連邦の現実をみれば、Soviet Model の果した驚くべき業績を認めざるをえないが、それと同時に Soviet Model は近代化のための Model の一にすぎない、これに代って選択さるべき Model がまだあるというのである。Soviet Model が唯一の道だという政治的な理由もまた学問的な理由もない。普遍的な、あるいは必然的に一般に適用しうる型ですらない。これはロシアの背景、歴史、環境の特殊な諸力によって形成されたもので、主としてロシアに適用される型だというのである。

II 2日目の午後に取上げられたのはソヴェート農業のパターンとそのアジアへの適用の問題で、その報告者 Dr. Walter Klatt は英国外務省の経済顧問である。この問題に関する報告と討議はオランダの中近東専門家 Dr. L. Metzemaekers の司会で行われた。Klatt 博士の報告は、(1) 工業化以前の諸国の社会経済的パターン、(2) ソヴェート農業のパターン、(3) Soviet Model の教訓という三段階に分けられている。

(1) まず Klatt 博士は次のような社会経済的分析から始める。工業化以前の諸国では、一方、地主・

商人・軍人が支配層として存在し、他方、大多数の農民が被支配層として、貧窮と病気に悩み、時代遅れの農耕技術、僅少の収入に甘んじている。人口過剰、文盲者の高い出生率と死亡率、都市の失業と農村の不完全雇用、広汎な貧窮と並んで少数者の手による富の集中に示される社会の両極分解、高額な土地賃貸料と法外な高率利子、低い平均国民所得及び個人所得、不完全營養、機械力を用いず、最低生活を辛うじて維持するに足る農耕の支配、その結果として一人当りの低い生産、高い借地付帯義務と保有地の零細化、低い労働力流動性、資本主義的工業ではなく、むしろ cottage industry によってあてがわれる限られた非農業的職業、低水準にある貯蓄と資本形成と個人及び公共投資、これらが現象面にみられる。

Klatt 博士はアジアの工業化以前の諸国の社会的パターンは農村を基盤としているという。種族信仰や迷信は政治の表面から姿を消していない。だから中世の生産様式と近代民族国家の要求とがぶつかり合って緊張を生んでいる。政治的指導者や経済立案者はしばしば西欧的なゆき方には批判的で、中央集権政治と計画経済という Soviet pattern に心惹かれる傾向がある。ソヴィエトの指導者と同様に彼らも農業を軽視し、工業化を万能薬と心得ている。彼らはしばしば農業問題に無知であるか、あるいは工業問題に気をとられている余り、農村社会の生活や福祉の問題に盲目である。その結果、アジアの計画経済は、私有財産の国有化、重工業化、農業集団化を特徴とする共産主義パターンを模しつつあり、農村社会の要求とかけはなれているのが普通である。

しかしアジアの工業化以前の諸国では農業が大多数人民の主たる生業である。一人の人間を工業に配置するためにはすくなくとも 600 ポンドかかる。場合によっては 1000 ポンドもしくはそれ以上かもしれない。そうだとすれば年々増加する人口を吸収するのはまず不可能と断言していいし、農業から工業へ転換させられないのはいわずもがなだ。そこで絶対的必要事といえば農業生産の増大と農村収入の改善に専心することだ。農業生産がすくなくとも年々 1.5% 増えないことには現在の低水準の消費すら維持しえない。生活水準向上のためには農業生産の年額 3% 増が必要だ。ところで現在の諸条件の下では農業は到底かかる野心的な任務を遂行するに適していない。生産を増加するためには大規模な制度上の変化と技術上の改善が必要である。そこで農業改革が経済的社会的発展の前提条件となる。地主制や高利貸制は廃止されたところも若干あるが、しかし富の再分配は未解決のままのところが多い。

(2) 次に Klatt 博士はソヴィエト農業のパターンの問題に移る。西欧側の明確な指導がないために、アジアの政治的指導者はソヴィエトの道を求める傾向がある。それ故、ソヴィエト農業のパターンの諸特徴をあきらかにし、それがアジアの諸条件の下で適応性をもつや否やを検討するのはアジアの指導者にとってもまた西欧諸国にとっても有益であろう。ソヴィエト農業のパターンは今日と雖も変わっていないと博士はいう。過去の技術的なあやまりは改められつつあるが、大規模農業への過程それ自体は改められていない。ソヴィエト農業のパターンの根本的概念は不変のままである。

(3) ところでソヴィエトは農業面では失敗している。農業面の失敗はソヴィエト側も認めているにもかかわらず、アジアの政治的指導者、経済計画者、また農業改革者は Soviet Model の短所に対して盲目であって、むしろこれに魅力を感じている有様である。そこで Klatt 博士は Soviet Model から学びとられるいくつかの教訓を最後にあげている。

まず農業に適用される術語の用法をはっきりさせることだ。ソヴィエト共産主義の語義学は西欧の制度とソヴィエトの制度との間の本質的相異をぼかしてしまった。西欧のすぐれた註釈者でも時には Co-operatives とソヴィエト・タイプの Collectives とを混同することがある位だ。Co-operatives というのは「下からの」要求に応じて創られた自発的な組織にのみ適用される用語であって、コルホーズというものは「上からの」決定によって創られ、そのメンバーの明白な意志に反して強制された組織のことである。

次にソヴィエト農業の型を広く知らせるためには、ソヴィエトの資料を利用する必要があり、たとえばフルシチョフの演説などは全文引用するに値する。西欧の批判者がソヴィエトの現実を分析したものよりも、フルシチョフが率直に過去の失敗や現在の困難を述べているものの方が効果は百倍だからだ。

最後にマルクス理論の誤謬があきらかにされない限り、ソヴィエト農業のパターンは工業化以前の社会において依然としてその魅力をもちつづけるだろうということだ。今日この解明が十分行われていない。問題の核心は、工業と同様に、農業においても、大規模な経済単位が小規模な経済単位よりもより高度の生産をあげるや否や、また政治的にもそれはより望ましきものなりや否やである。この問題においてマルクス主義者その他は方法論的誤謬を犯している。工業企業とその経済的発展の役割

をはかるに当って、資本と労働の投下が常に尺度として用いられてきた。マルクス主義理論家がこれと同じ尺度を農業に適用したならば、生産を決定するのは規模の大小ではなく、資本と労働の投下であって、規模の大小はどのような型の農業が行われるかによって相対的に変るものだということが分ったはずだ。ここから、経済的に発達している国では、面積において比較的小さくても、資本と労働の利用において集中的な農業が経済的 また 政治的観点からもより望ましき形だという結論が出て来る。

もしこの結論が認められるとすれば、技術や管理の問題に対する回答も容易であるし、また政治的決定と農業の現実との間に対立も決して生じない。土地を集中的に利用するための設備の方が巨大なトラクターよりもいいだろうし、肥料を買ったり、酪農品を売ったりする Co-operatives の方が MTS よりいいということになる。ただ労働力に比較して農地があり余っているところでは大規模な機械化農業の方が小規模な農業単位よりも決定的に有利であろう。マルクス主義農業理論の方法論的誤謬が分っていたら、おそらくアジア東欧また中国の共産主義者が革命の初期の段階には農民を戦術的な同盟者とし、その後になって農業における社会主義の終局目標と考えられた集団化のために農民を見棄てるというチレンマに陥らなかつたにちがいない。農民を最もゆるしがたい敵とする代りに、共産主義者は農民を彼らの同盟者とし、遅れたブルジョア的改革の成果と産業革命の成果とを組合せることができたかもしれなかつた。

アジアの農業社会が同様のあやまりを犯さないようにするためには、もとよりマルクス主義教義の理論的誤謬やソヴィエト農業政策の現実的失敗を認識させるだけで十分というわけではない。長い間の懸案であり、社会的変化と経済的進歩の前提である農業改革が実行されるならば、これらのあやまりは回避されるであろう。そして富と収入の再分配こそは道徳的問題といわんよりはむしろ都市及び農村の中産階級の成長の前提であって、この中産階級はアジアの知識階級に共通にみられる frustration と反抗の意識の代りに市民的責任感を発揮する支配階級として要望されるものである。そのような結果が生まれて始めて、たとえ制度上また技術上の変化を伴わないとしても、農業改革は成功したといえる。と結んでいる。

III 第三の報告はソヴィエトの工業化がアジア諸国のモデルとなるかという問題で第3日の午前に行われた。その報告者は Rand Corporation の Dr. Oleg Hoeffding であって、アメリカにおいても有能な経済専門家である。Hoeffding 博士をまずソヴィエト国家の計画経済は全政治的社会的体制の一構成要素として機能していることを指摘している。したがってアジアでソヴィエトの計画経済の経験を利用するためにはソヴィエト型の全体主義体制を受容しなければならぬ。中国がそうだ。そこでもし全体主義体制につきものの強制的手段を排斥するならば、経済発展のために異なる道を求めなくてはならぬ。印度がそのような道をとっている。一体、重工業優先、農業軽視の急激な工業化に専念するソヴィエト型の実行が果してアジアにとって望ましきや否や、また容易なりや否やは甚だ疑わしいとして、Hoeffding 博士はいくつかの根拠をあげて、その提出せる疑問を立証している。つまりソ連邦はその経済発展を遂行するに当り、アジアに対し、就中次のようないくつかの利点をもっていたというのである。

a) ソヴィエトの計画経済は長期に亘る段階のロシアの資本主義発展によって置かれた基礎の上に建設することができた。1913年になるとロシアは国民所得に対する貯蓄の割合において初めて大幅な増大をみせたと考えられるのであって、これは経済的進歩のために最も困難な第一歩であるが、アジアではこれからこの第一歩を踏み出さねばならないのだ。工業的にもロシアは西欧諸国と比較すれば後進国であったが、しかし今日のアジアと比較すれば後進国ではなかつた。1913年の一人当りのロシアの工業生産は1956年の印度のそれより上廻っている。

b) ソヴィエト以前のロシアは一人当りの農業生産においても今日のアジアよりも上であった。1913年のロシアの一人当りの穀物生産は1956年の中国のその2倍であり、印度のその3倍である。しかも今日ソ連邦の人口は1913年当時より5000万人増えているだけである。このことはアジアに比べてソ連の食糧問題を極めて容易にするものだ。ところが印度だったら人口が5000万増えるには僅か10年、中国だったら4年ですむ。このおどろくべき人口増加率が問題だ。アジアの発展計画はあきらかに農業生産の拡大が先決問題だ。その分野ではソヴィエトの政策は余り有益な教訓を与えていない。

c) ソ連邦では種々の要素がむすびついて経済発展に伴う雇用問題が解決されている。農業に用いられた強制的な統制は農村消費を抑え、生産をあげ、かくして急激に増加せる非農業労働力をささ

てゆく上に効果があった。これらのことが相俟って農業以外で雇用は急速に増大しえた。同時に嚴重な消費統制は極めて高率の強制貯蓄と資本形成をもたらした。これらすべてのことによってソ連邦は10年たらずの間に非農業雇用を3倍にし、全雇用における農業の配分を急激に減少させ、農村人口の絶対数の低下を実現した。しかしかかる変化、とくに農村人口の低下は以上の強制的なやり方の効果ばかりでなく、集団化と饑饉の悲惨な結果をも示すものだ。第二次大戦という人口上の災厄のち都市集中化の傾向がまた始まって、そのお蔭でソ連邦は経済発展を完全雇用とむすびつけることができた。今日ソ連邦農業は依然として労働力の43%を雇用している。これは西欧の水準からいえば高いが、アジアのそれに比較すればうらやましいほど低い。このソヴィエトの経験の結果はアジアにとって真似たいところだが、しかしソ連に幸いした種類の災厄でもなければ、まず近い将来にそうなる望みはない。中国の経験が示唆しているように、ソヴィエト式の強制的なテクニックを以て拍車をかけられた工業化でさえ、雇用問題は完全に解決されていない。最近の工業発展はめざましいが、工業その他の非農業部門では労働力の自然増加のほんの僅かな部分が吸収されつつあるにすぎない。農村人口は益々増えている。この農村の過剰人口、労働力の過剰をどうしたらいいかは中国にとっても大問題であるし、他のアジア諸国にとっても同様である。工業化の進んでいる日本でさえも雇用問題は何とかせねばならぬ重要問題である。

最後に Hoeffding 博士は最近の中国のやり方をみていると、アジアの経済状態、また人口状態に即して、元来の Soviet Model がかなり修正を要することを知ったのではないかと思われると述べている。とくに興味のあるのは 1) “Small plants campaign” (小・土・群の方式)、2) 農村過剰人口利用のための灌漑、土地開墾、3) 産児制限である。もし中国がこれら三点について外国の先例をさがそうとするならば、ソ連邦ではなく、アジアにその先例を見出すことができるであろう。印度や日本がその先例を提供している。共産主義のまた非共産主義のアジア諸国はそれぞれ独自の解決を求めることが大事だ。何故ならソヴィエト・ロシアのまた西欧の発展の経験にしても、アジアの最も重大な諸困難のあるものにそれらは回答を用意していないからであると Hoeffding 博士は結んでいる。

Inkeles 教授の報告は Soviet Model にアプローチするためのいくつかの提議を提出している点において興味があるし、また Klatt 博士の報告は富の再分配による中産層創出の農業改革の提案において、Neo-narodnik 的立場が面白い。最後の Hoeffding 博士の報告はアジア諸国の近代化にはそれぞれ独自の道があるはずで、印度の道、日本の道という先例を注目している点が興味をひく。これら諸報告の紹介にみられる通り、いずれもアジア諸国の近代化のために Soviet Model の applicability を疑っている点では一致している。Inkeles 教授は政治的また道徳的な観点から、Klatt 博士は工業化以前のアジア諸国の社会経済的パターンの基盤が農村にあるという立場から、また Hoeffding 博士はアジア諸国がソ連邦の成就せる工業化のための経済的諸条件を具備していないという解釈から、それぞれアジア諸国に対する Soviet Model の applicability を疑っているのである。これはこの会議の共通せる結論であったといっている。

この会議は終始充実したまた真剣な会議であった。食卓においてすら白熱せる議論がたたかわされた。たとえば私が偶々 Inkeles 氏や Oxford の Peter Wiles 氏また London School of Economics & Political Science の Alec Nove 氏と同席したときなども、Inkeles 氏と Wiles 氏との間に急激な工業化が暴力を伴うや否やで激越な論争が展開された。この問題はすでに Inkeles 氏の報告のあとで Mehnert 博士から提出された疑問であったが、Inkeles 氏は急激な工業化は暴力なくして可能だという立場をとっていた。Wiles 氏はこれに反対で、それが食卓の議論となったのである。

この国際会議は第2回目になる。第1回は1956年9月西独 Bonn の郊外で行われた。第3回は1960年の予定で、日本で開催される見込みが大きい。私は日本で開催されるかも知れぬ第3回ソ連問題国際会議に日本の専門家が多数参加してソ連問題研究の発展に寄与することを期待している。